（1972年6月3日第三種郵便物認可）

赤★星

THE SEKISEI（RED STAR／ROTE STERN）

編集　共産主義者同盟（DER BUND DER KOMMUNISTEN）

発行所　蜂起社　東京都江東区大島3－9－25／ＴＥＬ 03－5626－8262

発行人　南　安明　〈振替〉00120－2－1512　蜂起社・南安明

月刊

9月 2005年　No.48（通巻390号）

本号300円

年間購読料　1部3000円（送料別）
（送料）　密封1000円　開封800円

紙面案内

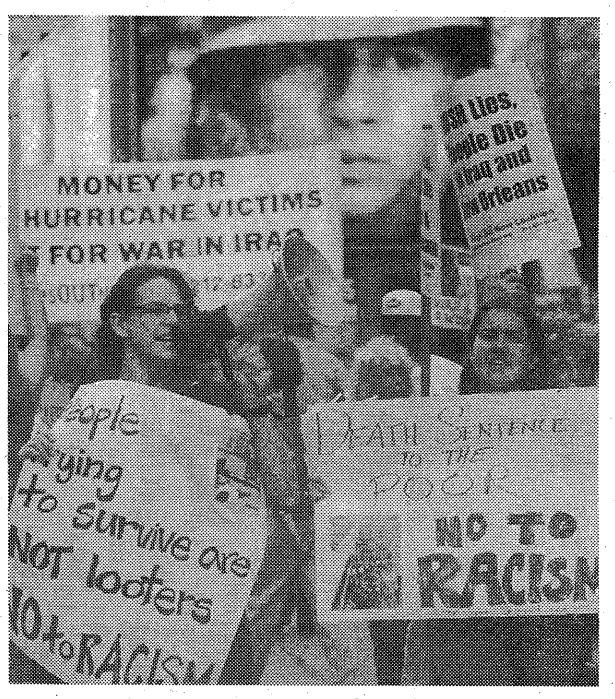
1　「持たざる者」の連帯を！
2－3　共産同（ブント）再建へ
3　山谷闘争と底辺－下層労働運動
4　沖縄／山谷／日韓／三里塚

お知らせ　次号は10月中旬発行です。

Anti-Imperialism!Anti-Globalism!

「持たざる者」の連帯を！

今こそ沖縄から米軍基地をなくそう！
9・4防衛庁「人間の鎖」行動



9月2日、ニューヨークで「イラク戦争ではなくハリケーン被災者に金を使え」と抗議する人々（ロイター）

持たざる者が被災 米ハリケーン災害

米南部を襲った（8月29日上陸）大型ハリケーン・カトリーナによる大洪水災害が米史上最大級の惨事であることが次第に明らかになるにつれ、米ブッシュ政権は窮地に立たされている。大統領の支持率は過去最低の38％（ニューズウィーク誌）に落ち込んだ。

「9・11テロ事件」以降の4年間、対アフガニスタン・イラク攻撃－占領など「テロとの戦い」を掲げ軍拡路線を突っ走ってきたブッシュ政権に対する疑問や批判、怒りの声がハリケーン被害の惨状を目の当たりにして一気に噴出している。被害が拡大した背景には、ブッシュ政権による不手際と人命軽視、つまり「人災」の側面があること、しかもイラク戦争－占領の長期化による戦費の増大の一方で防災工事予算が削減されてきたことが影響している、という批判が内外から巻き起こっている。

ニューオーリンズの地元紙「タイムズ・ピカユーン」は、ブッシュ政権に対する怒りの公開書簡を掲載して「救援されるべき人々が救援されなかった。これは政府の恥だ」（9月4日付）と批判。ワシントンのホワイトハウス前では「恥を知れ」とのプラカードを掲げた抗議行動も展開された。

自然災害のおそろしさ以上に米国民にショックを与えたのは、災害発生から何日もたっているのに食糧や衣類などが被災者にいっこうに届かない中で、多くの人々が飢えや渇きで死んでいるという惨状だ。世界で最も豊かなはずの自分の国が、なぜこれほど無残な姿をさらけ出さなければならないのか。放置される死体、衰弱する子どもや老人たち。テレビで映し出される悲惨な画像を前に「これが自分たちの国か」と、「世界の民主化」まで掲げる「世界最強の国」が自国民の命や安全、生きる権利すら守れないという現実に人々は衝撃を受けた。こうして救援の遅れはイラク戦争優先・人命軽視のブッシュ政権による「人災」であり「犯罪的怠慢」だという声が高まった。「テロとの戦い」に国民を駆り立ててきた「国民の安全を守るため」という殺し文句は、すっかり説得力を失ってしまったと言える。

ハリケーン・カトリーナによる被害の甚大さは、米社会の歪みを浮き彫りにした。それは、80年代からこの20年余、米歴代政権によって進められてきた「小さな政府」路線――民営化、規制緩和、社会福祉削減を三位一体とした新自由主義政策――の追求が、大規模な自然災害には有効に対応できないばかりか、競争原理を重視するグローバリズムによって、不公正と不平等、失業と貧困が拡大し、「災害弱者」（最も災害を被りやすい貧しい人たち）に矛盾と犠牲が集中するという現実である。

ニューオーリンズで最も犠牲を被ったのは、避難するにも移動手段（車）を「持たず」、レンタカー代も払えない黒人（約7割）を中心とした貧しい人たち（約3割）だった。「ハリケーンで生き残った者と死んだ者の違いは貧しさと肌の色だ」という声すらあがる所以もここにある。

貧困層が災害リスクの高い地域に住む「災害弱者」であることは米のような豊かな国も途上国も同じである。ベルギー・ルーバン大学の研究所によると、25年間の世界の洪水死者約17万人のうち低所得者が50％で高所得者はわずか1％だった。「命の価値」が資本主義社会では平等ではないことが如実に示されている。災害で最も犠牲を被るのは生きる権利すら奪われた「持たざる者」だ。

ガザは始まりに過ぎない！

8月、イスラエルは、67年の第3次中東戦争以来占領してきたパレスチナで初めて入植地を撤去した。かつて「入植地の擁護者」とさえ呼ばれ入植を推進してきたシャロンが、「ガザ全面撤退」に踏み切った理由はイスラエル自身の深刻な経済危機と出国者の増加－00年のパレスチナ民衆の第2次インティファーダ開始以降の3年間だけでも約20万のユダヤ人が国外に脱出（移民省発表）――などによってシオニスト国家としての存立基盤が揺らぐ中で入植地維持にかかる膨大な軍事コストにたえかねたシャロン政権が、ガザ撤退によって軍事コストを切り詰め、より大規模な入植地があるヨルダン川西岸の占領を固定化するためである。

実際シャロンは、西岸の入植地について「永遠にイスラエルのもとにある」と事実上の「併合」を公言している。ガザ撤退の一方でエルサレムの東郊に新たな入植地を作り、それを囲い込む形で「隔離壁」の建設を着々と進めているのである。ここに、ガザを「トカゲのしっぽ切り」のように捨て、西岸の入植地を維持するというシャロンの「パレスチナ分離政策」の戦略的意図が端的に示されているが、そもそもパレスチナ民衆の頑強な抵抗に手を焼いた末に撤退を余儀なくされたというのが実情なのである。事実、ガザのユダヤ人入植地グシュカティフには、この5年間で5千発のロケット弾が打ち込まれたという。まさに「ガザは始まりに過ぎない」のだ。新たな（第3次）インティファーダは避けられないのである。9・28第2次インティファーダ5周年パレスチナに連帯を！

小泉圧勝の行方

9月11日投開票の総選挙で自民党が圧勝した。小選挙区制という歪んだ選挙制度に特徴的な結果とはいえ新自由主義と右翼ポピュリズムを基調とする小泉政権の基盤が強化されたことに、海外のメディア、特に韓国や中国などアジア諸国では、教科書や領土問題に加えて「靖国」参拝や改憲への動きにも弾みがつくと予想、対アジア関係の悪化を懸念する声が上がっている。韓国のメディアでは自民党圧勝を「保守－右翼体制が強まる」と論評。またＡＦＰ通信は「ほぼ50年間も同じ政党が政権を握る状態は民主主義として異常」と報じた。

共産同（ブント）再建へ

党組織建設の総括と教訓

〈槙　渡〉

〈I〉共産主義運動の再生 担うブントの再建へ

〈1〉

「新しい左翼運動」の黎明期を切り拓いた60年安保―70年安保闘争において、ブントが放った光が強烈だっただけに、2次ブント分裂以降の新左翼運動の退潮という「闇」は、コントラストが際立って一層深く感じられた。だが、たしかにスポットライトを浴びはしなかったが、70年安保闘争敗北以降の「時代の苦悩と困難」を引き受けながら――決して、そこから逃げずに――数々の闘いを担ってきたところに、現在の我々の存在意義（レゾン・デートル）がある。沖縄解放闘争しかり、三里塚闘争しかり、山谷を拠点にした「持たざる者」の国境を越えた連帯運動しかり、日韓の労働者民衆の国際連帯しかり、パレスチナ連帯運動しかり、そして反戦闘争実行委員会を共に担い取り組んできたこの間のイラク反戦運動しかりである。

しかしである、こうした我々の奮闘努力の甲斐もなく、この国の反戦―反グローバリズム運動は、いまだに大きく立ち遅れている、と言わざるを得ない。日本階級闘争は長い低迷期を脱し切れてはいない。何としても、この現状を打破し、新左翼運動―共産主義運動を再生して、階級闘争の革命的な転換と展望を切り拓かなければならないのである。ここに、ブントに課せられた重大な「試練と責務」がある。プロレタリアの「前衛」の役割を一体、誰が、どの党派が担えるというのだ。革共同両派が担えるだろうか。日本共産党が担えるというのか。否、否である。彼らにプロレタリアの「前衛」の役割を委ねられるわけがない。希望を託せるわけがない。

だがしかし、我々の党建設の現状は、革共同両派や日本共産党に遠く及ばない。後じんを拝しているという「体たらく」を率直に認めなければならない。今日の日本階級闘争の――イラク反戦運動の一定の盛り上がりがあったにもかかわらず――停滞した状況に、我々自身が責任を負っていること、「前衛」不在の現状をもたらしている我々自身の「立ち遅れ」を自覚しなければならないのだ。我々は自らの――とりわけ党建設の――「立ち遅れた現状」に歯ぎしりしながら悔しさをかみしめなければならない。そういう自覚と危機感、そして何としてもこの現状を打破しなければならないという情熱、これがなければ、新左翼―共産主義運動を再生し、党とプロレタリア階級の戦列を立て直すことはできないからだ。したがって、共産主義運動を再生し真にプロレタリアの前衛の役割を担うには、戦う労働者階級に深く根を下ろした革命的プロレタリア政党として共産同（ブント）を再建することが必須の課題となるのである。

〈2〉

未来に希望を託し、理想を目指して、世界の現実を変革する。そうした革命的実践活動＝共産主義運動を深く展望するには、いまを倍するくらいの試行錯誤を重ね、四苦八苦し暗中模索しないとおぼつかないであろう。そんな「時代の苦悩と困難」に我々共産主義者は直面しているのである。

共産主義運動の前途は、いくつものハードルを越えねばならない試練に満ちた長く険しい道程にちがいない。だからこそ、自己の現状の「立ち遅れ」を自覚し、旧い殻を破って「新しい党に生まれ変わる」という意志を込めて大胆な自己変革――組織の担い手自身の意識や活動の有り様を根本から変えること――を図りブントを再建することによって、それを共産主義運動の再生につなげていかなければならない。そのタイムリミットが来ている。

10年、20年というタイムスパンの中で見なければ、物事の本質や理論・実践活動の真価が明らかにならないということや、人と組織も変えられないということはある。だが、2次ブント分裂（69年）から30年以上経ち、ブント結成（58年12月）からあと3年で50年を迎えようとしている時、30年、あるいは50年という歳月を考えると、それは人も組織も意志さえあれば変わりうるという意味では十分な長さであったと言える。

そのほとんどが召還かあるいは変節していった1次―2次ブントの指導者たちが、何故お粗末で駄目だったのか。韓国の熾烈な闘いの中で斃（たお）れた数多くの闘士たちと比べるべくもない。60年安保―70年安保の二度の大闘争を牽引しながら、そのチャンスを党建設に生かしていくという意識性、そして虐げられた労働者民衆の怒りと苦しみに深く根を下ろしてそれを原動力に変革への情熱を燃やし続けるという思想と階級的立場に著しく欠けていたことにある。その結果、党的団結を強められず分裂を繰り返して大衆の信頼を裏切り失望を買ってしまった。つまり、機動戦・運動戦と陣地戦を結び付けられず、党建設に対する自己の日和見主義を自覚しない、そういうお粗末なリーダーしかいなかったから、他党派に後れを取りイニシアティブを発揮できないできたのだ。そうはっきりと総括しないと、同じ過ち（分裂・召還・変節）を繰り返すことになる。我々は同じ轍を踏みたくない。反目や裏切りによって団結を掘り崩し、バラバラに分裂させ、人を諦めや絶望へ導くことが国家権力の狙いである。希望や理想を捨て情熱や怒りを失った者は傍観者に堕する他ない。傍観者の未来は痩せ衰えていくだけである。

2次ブントの失敗から学ぶべきことは、自己の弱さ・立ち遅れを自覚せず、また（その克服の）備えを怠ったなら、そのような拙劣な指導では、情勢の変化に臨機応変に対応できなくなり同じ過ちを招くことになるということだ。必要なのは、先を見通す（先見性のある）堅忍不抜の指導力と迅速で強固な意志決定、そして何よりも戦う労働者階級に深く根を下ろし真に前衛の役割を担える革命的プロレタリア政党に生まれ変わる、自己変革することである。これが2次ブントの敗北から教訓を学び、ブントを再建するということの我々が考える中身である。

プロレタリア革命への道は、いくつもの困難を試練としてくぐらなければならぬ長く険しい道程であろう。だが、困難は自己の解放を勝ち取るための「代価」だと、戦う労働者民衆は考えている。幾多の試練を乗り越えることによって、初めてまったく違う新しい世界が拓けると考えているからだ。我々は、こうしたプロレタリアに深く根を下ろし、プロレタリアの団結を鍛え上げ、プロレタリアの前衛として戦う党を創ることなしに、敵に打ち勝ち、プロレタリア解放への「希望と理想」を担うことはできないのである。

「持たざる者」・プロレタリア民衆が「怒り抵抗し連帯する」反グローバリズム運動は、いまや国境を越えて燎原の火のように世界中に燃え拡がっている。この反グローバリズム運動をステップにして、プロレタリア解放への「希望と理想と情熱」の火を絶やしさえしなければ、「闘いの中に生きていることを全身で感じる」（韓国の労働歌「鉄の労働者」の一節）ことができさえすれば、どんな試練があろうとも世界は変えられる。どこまでもラディカル（根底的）に、どこまでもインターナショナル（国際的）に、反帝国主義―反グローバリズムの闘いの炎を燃やし続けること。それができれば、全世界を変革し獲得することは可能だ。

〈II〉「負の歴史」から教訓 学びブントの再建へ

〈1〉

我々の党組織建設の総括に関して、その基本的な問題意識を提起するならば、1次ブント、2次ブントの党建設の敗北と分裂を繰り返した「負の歴史」から教訓を学び、今後の「ブント再建」の実践にどう生かしていけるかということが何よりも前提にある。

1次―2次ブントの党建設が、何故分裂を招き敗北したのか。政治局や中央委員会を担っていた指導者たちのほとんどが、何故党と階級闘争の戦列から召還しあるいは変節していったのか。それは第①に、虐げられた労働者民衆の怒りと苦しみに深く根を下ろし、共に「怒り抵抗し連帯する」こと、そこを拠り所に、プロレタリア解放への「希望と理想」を担い、変革への情熱を燃やし続けるという共産主義者としての思想と階級的立場に著しく欠けていたからである。第②に、いかなる厳しい弾圧にもどんな試練にもひるまない堅忍不抜の団結を鍛え上げ、プロレタリアの「前衛」として戦う党を創る、という党組織建設への意識性の希薄さにある。革命的大衆行動を組織し発展させることを通して党を建設していくというオルガナイザーとしての意識・活動が中途半端で成り行き任せであったからである。すなわち、機動戦（武装闘争）と運動戦（街頭大衆行動・デモや職場・学園での闘争）と陣地戦（組織・拠点づくり）とを結び付けられない党建設に対する日和見主義・サークル主義――その裏返しが「人民の海」・策源を築くこと（階級形成）を放棄した革命戦争路線への拝跪や解党主義・組合主義への埋没である――への無自覚にあった。第③には、レーニン主義の組織思想―団結の原理である「民主主義的中央集権制」――それに基づいた組織的同志的信頼関係および「権利と義務」関係――に対する曲解や偏向にある。組織内部で「統一意志」を形成するためのプロセス――政治方針や路線・戦略・戦術を巡る意見の相違・対立を徹底して討論・論戦によって解決すること――やその基礎である「公正」と「責任」に対する軽視である。つまり、己の小さな面子や保身のために、意見の違いや落差を（克服するのではなく）相互不信や反目に転化し、中傷や陰謀によって同志を欺き裏切る、というアンフェアーで不公正で団結をないがしろにしたサークル根性と、そうした組織の在り方の「歪み」を疑問視することなく自己変革を怠ったことだ。

〈2〉

2次ブント以来のこのようなサークル主義が染みついた組織体質や党建設に対するメンシェヴィキ的な日和見主義を克服することは容易なことではなかった。自己克服を怠り組織の復元力を育めないできたツケは指導部の上意下達と御都合主義、組織成員の横並び意識、面従腹背と事大主義を生んだ。それは上辺を取り繕うだけの「形式主義」や「建前と現実の乖離」となって現れた。守旧的な発想と体質（思考と行動様式）から脱却することに努力を傾注しない組織や諸個人は、与えられたノルマ的活動に埋没して惰性（マンネリズム）と先送り（モラトリアム）を蔓延させ、自分では考えも判断もしなくなりおかしくなる。我々自身がそうだった。

「おかしい」ことを「おかしい」とも思わない無頓着さや御都合主義、事大主義。自分たちの欠陥や歪み、立ち遅れを認識・自覚できずに、疑問視することはあっても他人事として済ませる不作為。こうした批判精神や危機意識の欠如がやがて時代状況の変化や世界の変動を読み取る洞察力を衰退させた。状況の変化への感度が鈍い守旧的な発想に無自覚だと苦境に立たされた時に臨機の課題に対応できなくなる。また危機に際して、団結して困難を乗り越え自己を立て直し、変革する契機へ反転させるという意志を育めない。それればかりか現行の資本主義的な社会関係や生活様式に規定されて権威や命令には従順であっても主体的に責任を負わず、利己的で団結は二の次になり、自分の身の振り方・保身しか考えないようになる。状況の変化を深く洞察し、従来通りのやり方ではやっていけない（展望が立てられない）こと、間違っていなくとも不十分であること、立ち遅れていること、こうした自己の現状への厳しい認識に立って、目的に見合った方策や戦略、活動形態、組織の在り方を模索し転換・変革できなければ、「適応不全」に陥ってしまうのである。

このように自分たち（組織）自身の内的変容や世界の情勢の変動に対して、それを察知する「感性」が鋭敏であるか鈍感であるか、という差異が、その後の運動―組織の行方や展望を大きく左右することになる。自己の現状を相対化し不断に自己変革することが否応なしに迫られる。それが闘いの弁証法である。この試練の中で、労働者民衆と共に団結して闘うことへの情熱や創意が失せ希望を失ってしまったなら、理想を捨て、党と労働者階級を欺瞞し裏切ることになるであろう。

（3面〈続く〉）

山谷闘争と底辺―下層労働運動

荒木　剛

山谷争議団結成（81年9月）、全国日雇労働組合協議会（日雇全協）創建（82年6月）から、約4半世紀を経て、大きく変容する底辺下層の実相から、〈1〉戦前、敗戦後の底辺下層の闘いを継承し、55年体制下で背景化された闘いを復権した釜共・現闘の地平を引き継ぐ山谷争議団―日雇全協の闘い、〈2〉その闘いが呼び出した天皇主義ファシストとの激突、佐藤・山岡虐殺、200名を超す弾圧に抗した金町戦、〈3〉バブル崩壊と共に一挙化した野宿労働者の闘い、反失業闘争と「持たざる者」の国際連帯行動の位置を提起したい。

〈1〉

戦前の全協土建の闘いや敗戦後の底辺下層の闘いは階級闘争の重要な環として認知されて来た。例えば斎藤一郎『戦後労働運動史』では、朝鮮戦争前夜に「全体の闘争を急速に、質的にたかめ労働運動の転換のために大きな役割を果そうとした闘争」として、在日朝鮮人、全学連と共に「ニコヨン労働者の仕事よこせ闘争」をあげ「何よりも行動的であり、階級的連帯の思想に貫かれている点が教訓的であった」と述べる。

日共が主導した全日土建（47年）から全日自労（53年）という展開は、六全協過程で、行動的であり階級的連帯の思想で貫かれている根拠としてあった在日朝鮮人と民間日雇層を切り捨て排除し、自らを労働政策との闘いに枠づける職安登録失対労働運動と規定した。

同時期は、敗戦期の日共主導の産別会議から民同―総評が労働運動主流として形成される時期であり、同時に52年職安法施行規則改悪で生産点に分断支配を制度化する労務供給事業が復活され、鉄鋼・造船等基幹産業に社外工制度や基盤形成産業（運輸・建設）に炭鉱（大手と小山）を加え、朝鮮戦争特需を踏み台に、戦前生産力を復活させ60年代高度経済成長の基礎を形成した。

社外工（社内下請）制度は「雇用調節的な役割よりも、むしろ本工の安定的雇用関係のいわば外在的条件であり、そして終局的には労務管理コスト縮減の条件なのである」（小林謙一『現代日本の雇用構造』）。

鎌田慧は71年「『臨時工制度』は撤廃されたかも知れない。が、しかし、八幡製鉄所の本工二万七二八四名に対し、社外下請工は全く同数の二万七三三六名にまで膨張した。この他、毎日、門鑑をもらって入構する日雇労働者や労働下宿、筑豊炭住友から出てくる臨時社外工である『組夫』達は、一日七、八千人といわれている」と、「日本資本主義の深層から」とサブタイトルの付いた『死に絶えた風景』に記録している。

60年代を通し幾度となく怒りを暴動として叩きつけた寄せ場―底辺下層労働者は、労務供給体制を通して搾取と収奪（ボッタクリとピンハネ）にさらされ、重層下請の現場で本工からも分断支配される。社外工の「組夫」の、そして離農した二・三男、閉山した炭鉱からはき出された元鉱夫、総じて底辺から底辺を流動する下層労働者だ。70年代初頭、実質二年余の闘いを通し底辺下層の画段階的地平を切り拓いた釜共・現闘は、非道の暴力で支えられた労務供給体制による就労過程と、労供体制を条件とした現場の分断支配に抗する労働運動を始動させたのだ。「現実総体と対決しなければ解放されない存在」（船本洲治）である流動的下層労働者を最も労働者らしい労働者として位置付け差別的な「ルンプロ」規定に抗して突き出した。

80年代、オイルショックによる「減量経営」で港湾荷役等は技術革新で二次下請を不必要とし、鉄鋼・造船は構造的不況業種化する一方、欧米が失業増大にあえぐ中、低成長といえ消費飽食で日本企業は富み、民間設備投資・マンション建設、そして失業の受け皿産業として公共事業工事を引き出す建設業に寄せ場は特化した。慢性的アブレ地獄の中で、運動戦略を平タコ飯場―手配師制度に据え、また闘争の歴史的視点から国際主義的任務を日朝労働者連帯に据えて山谷争議団は81年始動した。

「半タコ飯場―ケタオチ戦の嵐を」と野宿や施設（精神病院、監獄等）収容の生活過程での攻防も環にしながら、野宿場所へのパトロールを通してケタオチ・半タコを掘り起こし、連続争議と監獄法改悪阻止ハンスト闘争をセンター前拠点で闘い抜いた。その只中で82年4月25日、路上強盗を防衛する警察権力に労働者の怒りが爆発、千人の労働者による交番破壊。かけつけた機動隊さえ追い散す〝解放区〟を実現。山谷に暴動は起こらないという敵の願望を打ち砕いた。

日朝労働者の連帯のために、今こそ、全泰壹（チョン・テイル）を！を課題としつつ、飯場争議を通し、飯場内立ち入り、組合活動を認めさせ業者都合アブレの六割保障等を実質化する方途を構想する段階を迎えんとした。

〈2〉

82年連続争議の只中で、義人党系飯場に於て「民族のために血をながせ！」と唱える全国民声合同労組の存在、83年2月、横浜で発覚した少年等による野宿者連続虐殺…、状況の煮つまりは速度を早め、11月国粋会が「争議団をブッ潰す」と皇誠会を名乗り登場。ナチ棒と催涙ガスの襲撃も粉砕、右翼街宣車を炎上させた。

義人党も国粋会も右翼暴力団、利害なしには動かない。が、義人党―飯場、国粋―寄せ場（手配権）、労供体制の場で共に民族主義・天皇主義を掲げて登場、国粋はファシスト突撃を繰り返す。労供体制再編が進行し、皇誠会（西戸組）が事務所閉鎖後、互助組合として業者・手配師をたばねにかかる。この時期（84年4月）日本建設業団体連合協会（日建連）会合に一次下請団体である東京躯体工業組合が「山谷の労働問題―日雇全協・山谷争議団についての要望書」を提出。明白なことは、国粋会は、山谷をめぐる階級的力関係が、寄せ場―労供体制支配そのものを危うくしかねないという危機感を抱き、それが国粋にとどまらず飯場業者、一次下請・元請、そして権力にも及ぶ状況下、労働者への憎悪をバネに白色テロを先鋭化させることを担ったファシスト突撃隊であることだ。互助組合も粉砕された後の84年12月22日、映画を撮り始めた佐藤満夫氏を刺殺、反撃が止まないなか（それまでの弾圧者77名）、一年後の86年1月13日、山谷争議団のリーダーであった山岡強一氏の虐殺にまで至ったのだ。本格的日雇全協現闘体制がひかれ、以降91年まで労働者・支援含め200余名の被弾圧者と重傷含む負傷者を出しながらファシスト国粋会との熾烈な闘いが継続された。

〈3〉

ファシスト戦の只中で85年、「派遣事業法」実施が始まり、次々と拡大、建設、港湾を除く全業種化に及び、他方で何の法的規制も無い業務請負―偽装請負が逆に穴となるまでに至っている。

91年のバブル崩壊に至って失業の受皿であった建設業は、国の公共投資が大幅マイナスシーリングとなるものの、自治体での継続で96年まで就業人口を増やしたが（総就業者の12％）、不倒神話が崩壊し上場ゼネコンが相次いで倒産し、旧来の10％台に至っている。

山谷は、バブル絶頂の88年、日雇雇用保険手帳（白手帳）への住民票義務化、そして消費税を契機にドヤ一斉値上げが引き金となり周辺での野宿者が増加、そしてバブル崩壊と共に全国的に増加した。

労供体制も変容、とりわけ寿町はドヤも含めて労働者街から福祉街化が進行。飯場制度は健在だが、手配師制度は、スポーツ新聞、現役の直行化の加速、ケイタイでの求職が派遣業の拡大のなかで進行している。派遣業のスタイルで部屋まで準備する新スタイルの飯場も出現しており若年層が動員され始めている。

他方、駅・公園手配では、半タコでなくタコ飯場そのものが、野宿せざるをえない労働者の足元を見て出現し、飯場・現場に仕事での榛恣以外にトンコ番が付き、暴力が日常化するタコ飯場では、野宿者を求め東京―大阪展開を行い、賃金支払えず、と抗議する労働者3名虐殺と、悪虐に限りがなくなって来ている。

94年、パンと宿泊を求めて労働者がセンターを取り巻く状況下、センター前共同炊事（炊き出しを出すのでなく皆が参加し、皆で喰う）、集団野営を通し大衆行動の回路を形成し、5月センターを200人で占拠する。この取り組みの渦中、新宿での強制排除（ゴミ扱い）に怒り、立ちあがる労働者によって大衆行動が高揚し、他方、この高揚に動揺する分裂主義者が発生するが、大衆行動は前進した。百名体制でのタコ部屋正田争議によって、野宿者が自衛武装して飯場制圧、飯場内労働者への働きかけでその場で賃金精算させ脱出する労働者も出る。自力争議の上で、手配場所であり、労働者が帰って来る上野と、飯場所有地の管轄熊谷職安と大衆団交を通し、責任追及を行う。労働行政の後退に歯止めをかける取り組みが、以降、定着。

行政に対する要求を権利意識の育成と一体に計ることをおこたり、救済主義・代行主義・行政依存主義に陥る傾向を批判し抜き、階級総体の利害の中で自らを位置付けえない寄せ場主義も、また行政依存主義に陥る。今こそ、自らの取り組みを出来る限りグローバルな文脈で相対化して検証してゆくべきだ。

例えば、この春から韓国・蔚山プラント労組の闘いは非正規職撤廃闘争として闘われた。重層的下請の下で元請に対し労働協約の拡大適用を要求している。スト・ろう城・激突を、己れの人生を賭け闘う労働者が、そういう課題を掲げる労働運動が在る。それが希望であると共に、どうすれば自らを国境を越えて連帯しえるまでに高められるか。

また、NO・VOX（声なき者）はフランスや、ブラジルで「住宅は権利だ！」と占拠闘争を展開している。

その為に、まず当時者が「自分の置かれている状態を知ることが、最大の武器だ！」と立ち上がり、占拠し勝ち取った当事者が、今度は、いまだ住む所の無い仲間の為に、当然の事として行動してゆく。

「持たざる者」の国際連帯行動は、怒りと抵抗、そして国境を越えた連帯を獲得しえる。底辺下層に押し込められて来た者だからこそ「持たざる者」だからこそ全世界を獲得しえるのだ。

11・3「持たざる者」の国際連帯行動へ！

プロレタリア解放への「希望と理想」を担い革命的情熱に燃えて「前衛」の使命・責務を果たすという共産主義者としての思想と階級的立場が、党組織の担い手にしっかりと身に付いていないと、いびつな組織体質（不公正や無責任を生むサークル主義）がはびこり、団結を脆弱なものにしてしまう。自己のサークル根性や守旧的体質を根本から変えること、自己変革を「拒む」者は、自分の面子を保つこと（保身）だけを考え、自己の背信を正当化するために――同志を欺きミスリードしようとアンフェアーな陰謀や中傷を弄し――党的団結を犠牲にすることさえためらわなくなる。嘘で己を正当化し大衆を騙すことを顧みないエゴイストが、組織の担い手としてもまた一活動家としても、労働者民衆の信頼を得ることはできないということだ。それは脱落した旧指導者部らに体現されていた。彼らにはサークル主義から脱却しない限り、プロレタリアの「前衛」の役割は担えない、という目的意識や使命感は微じんもなかったと言える。これが我々の党建設の「負の歴史」から学んだ教訓である。

〈3〉

「サークル主義的な組織の体質改善を進めて強い組織を創る」ことを我々はこの10年党建設の基本に据えてきた。だが、それは、いまだ道半ばと言わざるを得ない。

この現状のままでは、「立ち行かない」という危機感を内在化できずに、今のままでも――内容（前衛の役割）を不問に付し棚上げさえすれば――やっていける、という守旧的発想と現状肯定志向が、組織内に根強くあるからだ。

韓国やパレスチナのミリタントたちと比べるべくもないが、悪戦苦闘もせず（命を取られることもないのに）、党建設の厳しさ・困難さに立ち向かうことを諦めて、大衆運動のヌルマ湯に安穏と浸っているサークル根性と惰性が自己変革を阻み「前衛意識」を希薄にしてきたのだ。

2次ブント以来のサークル根性が染み着いた組織体質と党建設に対する日和見主義、「前衛意識」の低さを払拭し断ち切らない限り、プロレタリアに深く根を下ろし、団結を鍛え上げ革命的前衛として戦う真のプロレタリア政党としてブントを再建することはできないのである。プロレタリアから託された「希望と理想」を裏切ることは許されないのだ。

闘いとは、幾多の「失敗の山」を築くことだと言われる。それゆえに、失敗や誤り、蹉跌を通して教訓を学び、自己の立ち遅れや弱点・欠点を知り、自分自身を変えようと苦悩すること自体に、弱さを強さに、敗北を勝利に反転させていく契機が宿るのである。

失敗や手痛い敗北を喫したり過ちを犯すという「代償」を払うことで、苦しみ悩み、その中で苦い教訓を学ぶこと、そうすることができて初めて、旧来の殻を破り現状を変えることが可能になるのである。賢者は歴史から学び、愚者は経験から学ぶという。この論からすると、己の失敗（ブントの2度の分裂）や過ち（日本人の戦争責任）から学ばず、同じ轍を踏む者は愚者以下ということになる。そういう逆説（アイロニー）が立証されてきた。

真に闘いに勝利したいのなら、我々自身の失敗を認め、そこから学ぼうとすること、自らの立ち遅れた現状を自覚し克服することに努めることだ。そういう柔軟さがなければ、時代状況の変化に対して「臨機応変」であること――その場の変化に臨んで状況を判断し適切な手段をとること――強靱であることはできないのだ。反対に、独善と開き直りは、立ち遅れた現状とそれを打破する可能性をグローバルでインターナショナルなコンテキスト（文脈）で考察することを妨げ、硬直した時代錯誤や守旧的発想に陥らせる。

強靱さを保障する柔軟さ・臨機応変さがなければ、「前衛」の役割は担えない。変革への情熱と創意に燃える「前衛」（の党）たりえない。

我々は、ブントを再建することを通して、反帝国主義―反グローバリズムの革命的大衆行動をステップに――イニシアティブを発揮し――、共産主義運動再生への展望を切り拓く。プロレタリア解放への「希望と理想」を担う情熱に燃えて、「前衛」としての役割・使命を果たしていく。

プロレタリアが全世界を変革し獲得することは可能だ！

現代世界の漆黒の闇に輝く「赤い星」たれ！

9・4 沖縄から米軍基地をなくせ！ 防衛庁「人間の鎖」行動

沖縄代表団を迎え700人の結集で防衛庁に怒りの鎖

「今こそ沖縄から米軍基地をなくそう！辺野古新基地建設を断念せよ！普天間基地を即時閉鎖せよ！」と呼びかけられた9・4防衛庁「人間の鎖」行動が、約700人の結集で勝ち取られた。

この日の闘いは、500日（8月31日）を越える座り込み闘争と海上行動で新基地建設を阻み続けている沖縄のヘリ基地反対協議会と命を守る会、そして14カ月にわたって毎週の防衛庁行動や沖縄への支援運動を担ってきた辺野古への海上基地建設・ボーリング調査を許さない実行委員会の共催で呼びかけられた。

午後3時頃より、防衛庁正門前に続々と集まり始める。それまでのどしゃ降りの天気も晴れ上がり、午後3時30分には正門を中心に左右の歩道に拡がって手と手をつないで鎖ができる。防衛庁を完全に包囲するには足りないが、それでも精一杯の抗議のメッセージを示すことができた。我々も反戦闘争実の隊列とともに鎖の一環を担った。

沖縄からは、ヘリ基地反対協代表委員の大西照雄さん、命を守る会から金城祐治さん、宮城保さん、宮城節子さんの4人が参加して防衛庁に対して沖縄から怒りの声を叩きつけ、抗議の申し入れを行った。

「今こそ沖縄から米軍基地をなくせ！」
9・4「人間の鎖」行動に700人が結集（防衛庁前）

その後、文京区民センターにて沖縄からの参加者との交流集会が250人の参加で行われた。

集会では、主催者あいさつに続いて沖縄からあいさつ。大西照雄さんは、「この1年余り、全国の思いが一つになって小さな勝利を勝ち取った。辺野古の闘いは新しいうねりを創りだしている。ボーリング調査の中止に追い込む決定的勝利まで闘い抜こう」、金城祐治さんは、「丸3日間、海上のヤグラにしがみついて闘った女性もいた。この燃え上がった力を絶対にゆるめることなく頑張ろう」、宮城節子さんは、「700人の鎖で喜んでいてはいけません。沖縄に来てオバアたちの体を張った闘いに学んでいってください。私たちは支援や激励ではなく連帯がほしいのです」宮城保さんは、「私たちの運動は非暴力だが実力阻止を貫く。ヘリ基地反対協は10年間頑張ってきた。しかし沖縄がどれだけ頑張ってももとを断たねばダメだ。この東京を変えてください」と、それぞれ気迫のこもった力強いあいさつに会場から拍手がおくられた。

集会は、韓国で反米軍基地闘争を闘うピョンテクの住民団体から「私たち韓国民衆も9・4の成功を祈ります、沖縄に連帯してともに闘う」メッセージが読み上げられ、立川テント村をはじめ、各地の反基地運動などの連帯発言を経て、盛況のうちに終了した。なお防衛庁前・交流集会を併せて23万円を超えるカンパが寄せられた。

沖縄では、8月31日、ヘリ基地反対協の呼びかけで「ボーリング調査阻止！座り込み500日集会」が名護市役所中庭で開催され、400人が全面撤回の勝利を勝ち取るまで闘うことを確認し市街地をデモ。那覇防衛施設局は9月2日、台風対策と称して掘削用の足場＝海上ヤグラをすべて撤去した。このヤグラ設置以降、体を張った海上阻止行動で掘削調査はまったく手がつけられていない。今後の再設置を許さず、全面中止に追い込もう。

一方、金武町の米海兵隊キャンプ・ハンセンに新たに建設された都市型訓練施設で強行された実弾射撃訓練に抗議して、7月には1万人余の参加の大集会が勝ち取られ、訓練の即時中止を訴えた。沖縄では95年10・21以来の超党派の抗議行動である。そして米軍ヘリ墜落1カ年にあたる8月13日、墜落現場の沖縄国際大学前で抗議集会が行われ、普天間基地即時撤去を訴えたアドバルーンも上げられた。

同日、沖縄の闘いに連帯して防衛庁前での抗議・申し入れ行動が70人の結集で闘われ、新宿駅頭の情宣行動も行われた。沖縄の怒りは高まっている。9・4の成果をステップに沖縄民衆と結び新基地建設阻止・普天間基地撤去へ！

9・9 WTO／FTA反対 民主労総迎え東京集会

9月9日、WTO／FTAを問う東京集会が文京区民センターにて約100人の参加で行われた（主催・9・9東京集会実行委）。昨年11月の日韓FTA（自由貿易協定）の東京開催に対しては日韓労働者の共同行動として外務省に肉薄する闘いが貫かれた。日韓FTAはその後、中断しているが、この国境を越えた闘いの地平を発展させ、11月釜山APEC、12月香港WTOに向けた闘いに向けて韓国民主労総を迎えての9月全国連鎖行動が準備されてきた。本集会はその一環としてある。

講演のチョ・ジュノさんは、民主労総の中心的存在である金属産業連盟起亜自動車労組を牽引し、昨年のFTA阻止韓国民衆闘争団の団長を務めた。以下は講演の要旨。

「今回は日本全国を回りながら、FTA／WTO反対の火種を植え付けようとやってきた。97年IMF危機と新自由主義グローバリゼーションの時代の中、個別企業の一過性の闘いでは勝てないことを痛感した。WTOは自由貿易の名の下で民衆の自由を奪う。FTAは韓国の労働条件を日本の労働者並みに引き下げ、より一層競争が強いられ、資本の流出も始まる。これが新自由主義グローバリゼーションの本質だ。このような悪だくみはアジア民衆が団結してつぶさねばならない。韓国の労働運動はこうした攻撃の中で新しい地平を創りだしてきた。日本人も自分たちが置かれている位置を自覚すれば立ち上がるだろう。暗たんたる時代だが希望は必ず見いだせる。日本の労働運動の経験と韓国の労働運動の生命力が結びつけば勝利できる。ともに手を取り合ってアジア民衆の新しい歴史を切り拓いていこう」

暫定滑走路の北延伸決定弾劾！ 10・9三里塚へ決起しよう

8・4暫定滑走路北延伸決定を弾劾する

8月4日、国土交通省は成田空港の北延伸を正式決定した。これは現在の暫定滑走路（2180メートルを2500メートルにするために、本来の計画である南側の用地取得が頓挫したため、計画にはない北側に320メートル延ばすというもので、7月15日には、成田空港会社（NAA）の社長・黒野は、「これ以上の交渉進展は見込めない。北への延伸案を採用したい」と国土交通省に報告していたのを受けての決定となった。

この暴挙に対して反対同盟はただちに弾劾声明を発した。この北延伸は暫定滑走路の欠陥と危険性を顕わにするもので、さらなる騒音によって住民を苦しめるものにほかならない。これは東関東自動車道が北側から400メートルの地点を横断することになり、本来無人であるべきところに頭上40メートルの高さで飛行機が侵入する。「へ」の字型誘導路に加えて段差ができることで危険性が増す。管制塔から遠すぎて滑走路が見えない。ターミナルと滑走路を結ぶ誘導路が狭くジャンボ機の飛行は安全基準を逸脱する。などの新たな問題が明らかになっているにもかかわらず、追い詰められたあげくの決定となったのだ。

7月24日には、暫定滑走路の北延伸阻止！三里塚現地緊急現地闘争が取り組まれた。反対同盟は、今回の暴挙と生活破壊攻撃に抗議し、住民無視の計画の問題を徹底的に暴き空港廃港まで闘い抜くことを宣言して敷地内デモを勝ち取った。8月7日には地域情宣が闘われた。北延伸攻撃を許さず、9・19から10・9三里塚現地闘争へ！

墨田排除行政を許すな
8・30 香取さん虐殺追悼行動

8・6山谷夏祭り

8月6日、玉姫公園にて山谷夏祭りが盛大に行われた。暑い中を夏祭り実行委に結集する仲間たちが、会場設営・準備に力を合わせ夕刻より労働者が続々と集まってくる。炊き出しに行列して、福引き、ゲーム、カラオケ大会、バンドを楽しみ、最後は恒例の盆踊りでしめた。煮込み、うどん焼きそばなどの屋台も充実し、ウーロン酎で乾杯、久々に再会する仲間や新たに出会った仲間などが交流のひと時を過ごす。山谷を取り巻く情勢は厳しく、地域生活移行支援事業の影響もあって参加者も昨年に比べて減少したが、団結を打ち固め、頑張っていこうと皆で英気を養った。

香取さん虐殺と排除行政を許さない！連続行動

7月13日、墨田区の大横川親水公園で野宿生活していた香取正光さん（64歳）が2人の若者になぶり殺しにされるという痛ましい事件が起きた。隅田川周辺では、年末から年始にかけて別のグループによる襲撃が続発したが、教育現場へのアプローチを含め襲撃と排除を許さない取り組みを積み重ねていただけに、今回の事件は痛恨の極みだ。

新聞報道によれば加害者は「ホームレスなら殺してもよいと思った」と供述しているという。この背景には、この間の墨田区（土木課）による強引な排除姿勢がある。香取さんが野宿していた公園でも警備員の追い立てが行われ、小屋を構えていた仲間も散り散りになっていたのだ。一方、隅田川沿いでは、地域生活移行支援事業の開始とともに巡回する警備員によって睡眠中も起こされて追い立てられるという事態になっている。これは睡眠妨害という生存に関わる問題ではないか！

この暴挙に抗するべく、さくら橋周辺では8月から集団野営をもって警備員の追い立てに対決する闘いに立ち上がった。同時に墨田区役所前で抗議情宣と土木課に乗り込んでの弾劾行動と弁護士の警告書も送りつけられた。墨田区土木課の「公園管理と適正化のために当然のことだ」「区民の苦情もきている」「殺害事件と結びつけるのはとじつけ」という開き直りに対して怒りが叩きつけられた。

こうした中で8月30日には、香取さんが殺された親水公園で70人が集まって追悼行動が行われた。参加者全員で黙祷し、現場に一人一人花をたむける。行動には、山谷から上野、隅田川で野宿する仲間を中心に渋谷、中野の仲間、さらに墨田、荒川の諸団体も参加して、香取さんの死を胸に刻み、排除に邁進する行政に対してはともに反撃していこうと誓い合った。排除を推し進める墨田区を許さず団交を勝ち取ろう。

9・3荒川にて朝鮮人殉難者追悼式行われる

9月3日、荒川の旧「四ツ木橋」近くで関東大震災82カ年朝鮮人殉難者追悼式が、グループほうせんかと関東大震災時に虐殺された朝鮮人の遺骨を発掘し追悼する会の主催で行われ、山谷圏からも多くの仲間が参加した。関東大震災における朝鮮人虐殺を忘れるな！一切の排除・排外を許さない、有事体制・治安体制強化に抗する荒川―墨田―山谷の地域共闘を打ち固め、9・23講演集会へ参加を！

9・23 差別・排除と人権を問う講演集会

講演・山田昭次（立教大学名誉教授）
「関東大震災朝鮮人虐殺の今日的意味」
午後1時30分・町屋文化センター
主催・荒川―墨田―山谷実行委員会